新約聖書 ヨハネによる福音書 18 章 33 節―37 節（新共同訳）

33 そこで、ピラトはもう一度官邸に入り、イエスを呼び出して、「お前がユダ
ヤ人の王なのか」と言った。34 イエスはお答えになった。「あなたは自分の考
えで、そう言うのですか。それとも、ほかの者がわたしについて、あなたにそ
う言ったのですか。」35 ピラトは言い返した。「わたしはユダヤ人なのか。お
前の同胞や祭司長たちが、お前をわたしに引き渡したのだ。いったい何をした
のか。」36 イエスはお答えになった。「わたしの国は、この世には属していな
い。もし、わたしの国がこの世に属していれば、わたしがユダヤ人に引き渡さ
れないように、部下が戦ったことだろう。しかし、実際、わたしの国はこの世
には属していない。」37 そこでピラトが、「それでは、やはり王なのか」と言
うと、イエスはお答えになった。「わたしが王だとは、あなたが言っていると
ことです。わたしは真理について証しをするために生まれ、そのためにこの世に
来た。真理に属する人は皆、わたしの声を聞く。」

※第 1 朗読と第 2 朗読は末尾に掲載

説教「真理」

イエスが十字架にかけられる日の早朝、イエスを死に定めようとするユダヤ人によって、イエスは大祭司カイアファのもとから、ローマの総督ピラトのもとへ引き渡されました。ローマ帝国に支配されていたユダヤ人には、死刑を執行する権限が与えられていなかったからです。

ピラトとは、どういう人物だったのでしょうか。彼は、本人の意志とは関わらず、イエス・キリストの道のりにおいて大きな要となった人物です。毎週礼拝時に私たちが告白する「使徒信条」の中にも「主は……ポンティオ・ピラトのもとに苦しみを受け」というくだりがあり、そこにもピラトの存在が示されています。

この使徒信条には、主イエス・キリスト以外に二人の名が記されています。一人はイエスの母マリア。そして、もう一人がこのポンティオ・ピラトです。そのたった二人のうちにこのピラトの名前が含まれているのは、ピラトの存在がいかに特別視されているかの表れです。

ポンティオ・ピラトは、ローマ帝国から任命され、紀元後 26 年から 36 年までの 10 年間、ユダヤ地方の総督を勤めていました。ピラトの名前は、聖書以外の歴史書にも出てきます。

聖書に記されたピラトの名は、イエス・キリストが、公的な権威のもとで裁かれ、十字架刑に処せられたことを示しています。イエスはテロリスト等によって命を奪われたのではありませんでした。イエスは、総督という正統な地位と肩書をもった人物（ピラト）によって、国家権力のもとでこの世から追放されたのです。

とは言っても、ピラトは、自分の意志でイエスを十字架につけたわけではありません。ピラト自身は、気が進まぬまま、イエスを憎む群衆の圧力によって、そうせざるをえない状況に追い込まれたと言えるでしょう。自分の判断ひとつで一人の人間を合法的に死刑に処すという大きな権限を行使したピラトでしたが、実のところ、ピラトにとってそのことは、群衆に屈したという敗北の出来事だったのです。

本日の福音書は、イエスが「死刑に値する人物」としてユダヤ人から総督ピラトに引き渡されたあとの、ピラトとイエスの問答の場面です。

ピラトは、国家の委任によって立つ総督であり、裁判官です。そのため、自分の職務と権限によって、イエスを裁かなければなりませんでした。

しかし、イエスの裁判のあいだ中、ピラトは落ち着かず、動揺していました。裁く側であり、大きな権威を持っているはずのピラトの姿は、終始揺らぎ続けていました。

イエスの裁判のあいだ中、ピラトは外に出たり官邸に入ったりと、行ったり来たりを繰り返します。外に出ては、「イエスを殺せ」という要求をぶつけてくる群衆の意見を聞き、中に戻ってはイエスを裁くための座で、イエスの言葉の前に途方に暮れていました。

ユダヤの祭司長たちは、宗教的な理由のみでイエスを訴えても、外国人であるローマの総督ピラトには取り合ってもらえないので、ローマ帝国に反逆する者としてイエスを訴えました。イエスが神の子・ユダヤ人の王と自称し、真の神の子であり王であられるローマ皇帝を冒涜している、としたのです。

ピラトは、彼らの訴えを取り上げ、イエスに「お前がユダヤ人の王なのか」と問います（ヨハネ 18:33）。

ピラトの問いに、イエスは直接答えず、こう切り返しました。「あなたは自分の考えで、そう言うのですか。それとも、ほかの者がわたしについて、あなたにそう言ったのですか」（ヨハネ 18:34）。

これは、イエスによるピラトへの「他者の意見ではなく自分自身の心の目で見る」ことを促す言葉だったのではないでしょうか。「あなた自身はわたしのことをどう思うのか」とイエスはピラトに問うていたのだと思います。

しかしピラトは、イエスのその問いをはぐらかし、「わたしはユダヤ人なのか」と言い返します。ピラトのこの言葉は、ローマの人間でありユダヤ人ではない自分が、民族内の問題に巻き込まれたくないという気持ちを表しています。

さらにピラトは、「お前の同胞や祭司長たちが、お前をわたしに引き渡したのだ。いったい何をしたのか」とイエスに言いました（ヨハネ 18:35）。

いわばイエスは、同国の人間に憎まれ、死刑に処するために外国人に引き渡された状況でした。イエスは、ありとあらゆる最大級の苦しみ、屈辱、孤独、心の痛みを引き受けて、そこに立っていたと言えるでしょう。

しかしイエスは取り乱すことなく、「わたしの国はこの世には属していない」と答えました（ヨハネ 18:36）。

主イエス・キリストの国は、ローマ帝国のように、この世界に目に見える領土を持っているわけではありません。しかしそのことは、イエスの国はこの世とは別のところにある、ということではなく、やはりこの世と直（じか）に深く関わっています。だから聖書はあえて「王」という、地上の国で用いる言葉を提示するのです。この世を超えた方、つまり神のもとから遣わされた方がこの世の真っ只中で、しかしこの世を超えた国の王として働いておられるのです。

ピラトは、イエスのその言葉の真意を理解できません。「わたしの国」という言い方を捉えて、「それでは、やはり王なのか」と問います（ヨハネ 18:37）。しかし、はっきりと理解できないながらも、ピラトはイエスの言葉に惹きつけられているようにも思えます。

そんなピラトに、イエスはこう言いました。「わたしが王だとは、あなたが言っていることです」（ヨハネ 18:37）。イエスは、ピラトが心の奥底で、ほのかにイエスに感じ始めている畏敬の念を言い表したのでしょう。

さらにイエスは、ピラトにこう明かしました。「わたしは真理について証しをするために生まれ、そのためにこの世に来た。真理に属する人は皆、わたしの声を聞く」（ヨハネ 18:37）。

テモテへの手紙 一 6 章 13 節にこう記されています。「万物に命をお与えになる神の御前で、そして、ポンティオ・ピラトの面前で立派な宣言によって証しをなさったキリスト・イエスの御前で」。

犯罪人として裁かれる立場に置かれたイエスは、死を目前にしても、ご自分がメシアであることを、偽りなくピラトの前で「証し」しました。

揺るぎなく堂々たる主イエス・キリストの姿がそこにありました。

私たちも、この時の主イエス・キリストの姿を心に写し、窮地に追いやられた時、誰も味方はなく孤独な闘いをしている時などに思い出して、力を得ましょう。

イエスは、直前の最後の晩餐で弟子たちにこう言いました。「勇気を出しなさい。わたしは既に世に勝っている」。（ヨハネ 16:33）

主イエス・キリストの御言葉とひとつになって、私たちは、どんな困難や苦難の中にいる時も、愛と勇気をもって、この世を共に生きていきましょう。

お祈りをします。
神様。今、大変な思いをしている人や、困難の中にいる人が、幸せな気持ちで、喜びにあふれて生きていくことができますようにお導きください。この祈りを、主イエス・キリストの御前に捧げます。アーメン

＊＊＊＊＊＊ 説教ここまで ＊＊＊＊＊＊

以下、本日に関連する聖書箇所（第 1 朗読と第 2 朗読）です。

旧約聖書 ダニエル書 7 章 9 節―10 節と 13 節―14 節（新共同訳）
9 なお見ていると、／王座が据えられ／「日の老いたる者」がそこに座した。
その衣は雪のように白く／その白髪は清らかな羊の毛のようであった。その王
座は燃える炎／その車輪は燃える火／10 その前から火の川が流れ出ていた。幾
千人が御前に仕え／幾万人が御前に立った。裁き主は席に着き／巻物が繰り広
げられた。
13 夜の幻をなお見ていると、／見よ、「人の子」のような者が天の雲に乗り／
「日の老いたる者」の前に来て、そのもとに進み／ 14 権威、威光、王権を受け
た。諸国、諸族、諸言語の民は皆、彼に仕え／彼の支配はとこしえに続き／そ
の統治は滅びることがない。

新約聖書 ヨハネの黙示録 1 章 4 節 b―8 節（新共同訳）
4b-5 今おられ、かつておられ、やがて来られる方から、また、玉座の前にお
られる七つの霊から、更に、証人、誠実な方、死者の中から最初に復活した
方、地上の王たちの支配者、イエス・キリストから恵みと平和があなたがた
にあるように。
わたしたちを愛し、御自分の血によって罪から解放してくださった方に、6
わたしたちを王とし、御自身の父である神に仕える祭司としてくださった方
に、栄光と力が世々限りなくありますように、アーメン。
7 見よ、その方が雲に乗って来られる。すべての人の目が彼を仰ぎ見る、／
ことに、彼を突き刺した者どもは。地上の諸民族は皆、彼のために嘆き悲し
む。然り、アーメン。
8 神である主、今おられ、かつておられ、やがて来られる方、全能者がこう
言われる。「わたしはアルファであり、オメガである。」

教会讃美歌　190 番「主のみ名によりて」1,2 節、239 番「ひととなりたる」1,2,4 節、333 番「山べに向かいて」1,2,4 節、253 番「カルバリの十字架に」1,2,4 節、199 番「主よいま去りゆく」1,2,3 節。